

書物學

6



書物学で始め

佐々木孝浩

鈴木俊幸

中野三敏

白川部達夫

植田康夫

高宮利行

●近代初期出版史瞥見…山田俊治

和装活版本

美装の系譜

特別寄稿●井田太郎

乗興舟瑣談

小特集●鼎談…佐藤道生×佐々木孝浩×堀川貴司

清原家の官・学・遊

●小特集

書

日本文化

が語る

海野圭介

日比野浩信

一戸渉

岩坪充雄

●インタビュー

和本がつなぐ人と文化

Documentary
和本—WAHON

の世界

BENSEI

日本「文」学史第一冊 「文」の環境——「文学」以前

A New History of Japanese "Literature"

Wiebke DENECKE (ボストン大学准教授)
河野貴美子 (早稲田大学文学部教授)

●「日本「文」学史」の問題意識

「日本文学史」を代表する作品を順にあげていくとするならば、上位を占めるのはどのような作品であろうか。『万葉集』『古今和歌集』『源氏物語』『枕草子』『平家物語』『奥の細道』……。こうしたラインナップは、おおよそ大方の賛同を得られるものであろう。

あるいは、大学で「日本文学」を専攻した場合は、どのような作品を学ぶことになるのか。そこで例えば平安期の文学として、『経国集』『和漢朗詠集』『本朝文粹』が取り上げられると、それが果たして日本文学なのかと首をかしげるのではないだろうか。しかし、

『経国集』は『古今和歌集』に先駆けて編纂された天皇勅撰漢詩文集であり、『和漢朗詠集』は平安中期以降長きにわたって人々の文学知識の基礎を支えたアンソロジーであり、『本朝文粹』は「本朝」における「文」の「粹」たる模範としての漢詩漢文作品を選び集めたものである。

いま私たちが通常思い描く「日本文学史」は、一八九〇年に三上参次と高津敏三郎によって編纂された日本初の『日本文学史』以降の「新しい」日本文学史であり、その『日本文学史』は十九世紀に「国文学 (national literature)」、すなわちある民族の特徴は自己の文学に内在するという概念がも

たらされ、そうした西洋からのインパクトを受けた後に作られたものである。そしてそのことは、よく知られたことではあるとはいえ、しかしながら私たちは、近代以降急速に「日本文学」としての立場を失ってしまった「漢文」や「和漢文」を含む文学世界がかつて日本に存在したことに対して、あまりにも冷淡であつたとはいえないか。

前近代の日本には、現在「文学」として認識されているとは異なる「文学」の概念、内容、意義があつた。例えば日本最初の漢詩集である『懷風藻』の序文は、日本における「文」の展開を、「文」字、「文」献、「文」明、「文」士・「文」人、「文」学など、現

在いうところの「文学」を超える、より大きな「文化史」として捉え説明している。それは多分に中国の学術文化、漢字漢文文化の影響のもとに出發したものなのではあるが、「文」は広く学知と文化の総体を指す謂であつたといえる。それが、近代に至ると、そうした「文」の概念や意義が忘れ去られていく一方、それ以前には「文」から遠く離れた存在であつた仮名草子などの文体が「俗文学」として「文学」の重要な位置を占めることになったのは、興味深い「逆転現象」である。つまり、現在いうところの「文学」は、かつての「文」の概念に比べてその対象をある面では狭め、ある面では押し広げた

わけである。

近世・近代以後、西洋の概念や学問との出会いが大きな契機となつて、日本のみならず、東アジア漢字漢文化圏においては、「言語世界の革命」とも称すべき事態が起こつた。例えば、社会、科学、哲学といった新しい概念を表す、新しい言葉が次々と生み出されたわけであるが、「文学」もまた、新しい時代の流れとともに立ち現れた概念であり、言葉にはかならない。そしてこれらの概念と言葉は、近代の学知と社会を形成するのに不可欠のものとして機能し、いまや私たちの現実の日常

生活に深く入り込んでいる。しかしこれは実のところ、かつて日本に大陸から漢字がもたらされて以来の、画期的な言語世界の革命であつたといえる。ところがそのことは、現代の私たちの通常の生活においてはほとんど意識されないというのが現実であろう。しかしその「革命」の成果と問題点について、繰り返し検証し思考することこそが、私たちを取り巻く文化や社会の本質と特質を捉え、歴史と現実を見据えていくことにつながるのではないか。

例えば、社会、科学、哲学といった言葉は、西洋からもたらされた概念や

●本書の構成と内容

本書の構成と内容は、従来の「日本文学史」とは大きく異なるものとなっている。

- 1、「文学」の概念に沿ってそれにそぐう作品の総体 (corpus) を紹介するのではなく、日本及び中国の言語の歴史と言語意識の変化の問題を取り扱う。【第一章「文」の概念を通して日本「文」学史をひらく」、第二章「古代中国における「文」の概念の展開」、第三章「文」の思想」、第四章「文」と「非文」の世界】
- 2、「文学」作品の内容にのみ意識を集めるのではなく、産み出された作品を物質文化を形成する一つの「モノ」として捉えてみる。【第五章「モノとしての「文」、第六章「目録と文庫」】
- 3、「文学」の産物としての作品を個別に紹介するのではなく、その「文」を産み出した環境や学知の基礎を明らかにする。【第七章「文」とリテラシーの基礎】
- 4、「文学」の作者や作品の文体を捉えるのみではなく、作品を産み出した「場」や、「文」が果たした社会的機能を検討する。【第八章「文」



勉誠出版・2015年9月刊
四六判・552頁・本体3,800円

と社会」、第九章「経国の「文」、第十
十章「文の場」

5、和文のみを集中して取り上げるの
ではなく、和文、漢文、あるいはそ
れらが混交、交錯するさまざまな文
の世界を捉え直す。【第十一章「風流
の「文」と詩歌」、第十二章「漢と和
の「文」」

以上の構成と内容は、「日本文学史」
を知りたいと希望する読者の期待を
裏切るものかもしれない。この『日
本「文」学史』は、百年余りの間に築
かれてきた「日本文学史」の伝統から
は大きく外れるものだからである。例
えば本書は、『源氏物語』や『枕草子』、
『万葉集』など従来の「日本文学史」
が欠かさず取り上げてきた作品を個別
に説明することはない。もちろん編
者は、『源氏物語』などの日本を代表
する作品を読み学ぶことに深い意味が
あることは十分に理解している。しか
し、何ゆえ『源氏物語』が国文学を代
表するカノンとなったのかということ
については、それを平安期の「文」の
世界に位置づけることによってこそ説
明が可能となるのではないか。従来の
『日本文学史』は、『源氏物語』とい

テクストや内容そのものを詳細に説い
てきた。しかし「文」の概念史を追究
する本書の方法を通して、『源氏物語』
が生み出された歴史的なコンテクスト
や、『源氏物語』を生み出すことを可
能にした環境、その文化的意義を、よ
り正当な、公平な形で示すことができ
るのではないか。そしてまた、『源氏
物語』をはじめ日本文学が有する世界
文学における特徴や意義は、平安期の
「文」の世界から『源氏物語』を捉え
直すことによってこそ明らかにするこ
とができるのではないだろうか。

●「日本「文」学史」全三冊の構想

——東アジアの「文」の意義と未来を問う

本書は『日本「文」学史』として、
「言語世界の革命」の前と後の日本の
「文」を検討するものである。まず第
一冊では「文」の環境、第二冊で
は「文」と人びと、というテーマ
を軸に「日本「文」学史」をとらえ、
そして第三冊では「文」から「文
学」へとして、現代に至る日本の
「文」と「文学」世界の形成と変遷に
ついて東アジアの枠組みにおいて検
証を試みる。

本シリーズは、日本の「文」の世界
を「和漢」の「文」に広く目配りして
捉えること、また日本の「文」を世界
の視点から捉えること、特に東アジア
の「文」の關係から捉えることに留意
して考察を進めるものである。

日本はかつて、東アジア漢字漢文文
化圏にあつて、いかなる「文」の世界
を育んだのか。日本の「文」は、東ア
ジアのそれとどのような異同があるの
か。また、近代以降日本が経験した
「言語世界の革命」は、東アジアにい
かなる影響、作用を及ぼしたのか。近
代以降の学知の再編に伴い、「文」の
世界は大きく様変わりし、そしてまた、
戦後から現在に至るグローバル化の
流れがもたらした「英語化」「米国化」
によって、かつて東アジアに展開し
た「文」の世界は既に消滅してしまっ
たかのようである。一方、近年は、中
国の急激な経済的文化的状況の変化や、
韓国ドラマに象徴されるポピュラーカ
ルチャーの発信によって、新たな東ア
ジアの「地域アイデンティティ」が
生み出されつつある状況にある。それ
では果たして、日本の、そして東アジ
アの「文化」はこの先どのように展開

し、どのような意義を発揮しうるのだ
ろうか。

また本シリーズは、現在当たり前の
ように存在している「文学」「史学」
「哲学」といった枠組みをいったん取
り払い、「文」の概念を柱として人文
学の新たな可能性を改めて問おうとす
るものである。例えば、新旧の「日
本古典文学大系」(岩波書店)に『日
本書紀』や『続日本紀』等のいわゆる
「歴史書」が入り、「新訂増補国史
大系」(吉川弘文館)に『本朝文粹』
や『本朝続文粹』等のいわゆる「文学
書」が収められていること、また『日
本古典文学大系』と『日本思想大系』
(岩波書店)の双方に『古事記』が収
載されていることはどのように説明す
ることが可能であろうか。「文学」「史
学」「哲学」それぞれの立場をあまり
に截然と分け隔てていては、日本の文
化と学知の真髄に迫ることは難しいの
ではないか。興味深いことに、西洋の
文化史においては、プラトン以来展開
されてきた「哲学」(philosophia)と
「詩」(や文学)の「喧嘩」の影響を受
け、「哲」と「文」は複雑な対立構造
をみせることとなった。つまり「詩」

「文」は哲学的な真理を語るといふより

もむしろその真理を曲解する可能性を
含む模倣(ミメシス)である以上、
文学はプラトンの哲学の理想の国家か
らは閉め出されなければならないもの
となってしまうわけである。それに
比べて東アジアにおいては、「文」と
「質・真」は相互に補い合うものであ
り、両者は対立したり、排除するもの
ではなかった。西洋の学問、学知の経
緯を確認しつつ、それを相対化するこ
とによって日本や東アジアの「文」の
特徴と意義を見出し、日本の学術・文
化をより深く理解していくことが可能
となるのではないだろうか。

日本そして東アジアの言葉と学知の
足跡を見直し、「文」の意義を改めて
問うことは、今、そして今後の「人
文」のあり方を問うことにはかならな
い。そうした目標と希望を掲げ、「人
文学の危機」が盛んに叫ばれ人文社会
学が存在価値が問われつつある今こそ、
真正面からその問題を見すえ、本書を
発信したい次第である。

『日本「文」学史 第一冊 「文」の環境——「文学」以前』目次

序 言

第一章	「文」の概念を通して日本「文」学史をひらく
第二章	古代中国における「文」の概念の展開
第三章	「文」の思想——和文に関する思想の萌芽をめぐって
第四章	「文」と非「文」の世界
コラム 1	木簡と「文」
第五章	モノとしての「文」——日本の書物の形態と内容の相関関係について
コラム 2	絵と文字
第六章	目録と文庫
第七章	「文」とリテラシーの基礎
コラム 3	辞書・幼学書・類書・注釈
コラム 4	大学寮
コラム 5	寺院の教育——僧尼志願者の「文」習得
第八章	「文」と社会①——社会階層と「文」
第八章	「文」と社会②——女性と「文」
コラム 6	ジェンダー理論と文
第九章	経国の「文」①——文体が担う社会的機能
コラム 7	外交と文
第九章	経国の「文」②——『典論』『論文』の受容と勅撰集の成立
第十章	文の場——「場」の変化と漢詩文・和歌・「記」
コラム 8	儒教の場と「文」
コラム 9	仏教の場と「文」 平安京から長安へ——実恵の青龍寺あて書簡をめぐって
コラム 10	神祇信仰の場と「文」——中臣祓の受容
第十一章	風流の「文」と詩歌
第十二章	漢と和の「文」①——秀句の方法
第十二章	漢と和の「文」②——藤原定家に見る縁語的思考
コラム 11	兼作の人
コラム 12	歌合と連歌
コラム 13	詩歌合・聯句・和漢聯句
コラム 14	「和」に描かれる「漢」の世界——『うつほ物語』の学問と帝たち
コラム 15	「漢(文)」で「和」を描き出す——和歌序の文体
コラム 16	「和(歌)」で「漢(文)」を描き出す ——『日本書紀』『蒙求』に対する注釈的和歌の意義

あとがき

第二冊：2016年刊行予定／「文」と人びと——継承と断絶

第三冊：2017年刊行予定／「文」から「文学」へ——東アジアの文学を見直す

Wiebke DENECKE・河野貴美子

Wiebke DENECKE

渡邊義浩

陣野英則

新川登亀男

市 大樹

佐々木孝浩

黒田 智

住吉朋彦

河野貴美子

河野貴美子

水口幹記

勝浦令子

榎本淳一

神野藤昭夫

緑川真知子

後藤昭雄

高松寿夫

滝川幸司

川尻秋生

水口幹記

阿部龍一

伊藤 聡

後藤昭雄

佐藤道生

渡部泰明

堀川貴司

高松寿夫

堀川貴司

陣野英則

Wiebke DENECKE

Jennifer GUEST

河野貴美子・Wiebke DENECKE

書物に関するイベント情報

『正訳 源氏物語 本文対照』刊行記念 特別展・講演会

中野幸一氏(早稲田大学名誉教授・平安文学研究者)による『源氏物語』の全訳、『正訳 源氏物語 本文対照』の第一冊刊行を記念して開催。

◆特別展「源氏物語道しるべ」

逗子アートベース128
2015年11月10日(火)～16日(月)
10:30～16:30 ※最終日は16:00
入場無料

九曜文庫が所蔵する『源氏物語』の絵巻などを展示。貴重な資料に触れ、源氏物語の世界をより深く知ることができる絶好の機会!! 本書掲載の『丹鶴図譜』『輿車図譜考附図』や、装幀に使用した伝土佐光信『源氏物語画帖』も展示。
同時開催「高山寺の名宝複製展」では鳥獣人物戯画絵巻など、高山寺の名宝の複製を間近で! 詳細は勉強出版までお問い合わせ下さい。

◆センチュリー文化財団寄託品展覧会 「元和偃武400年 太平の美 ——書物に見る江戸前期の文化」

2015年11月4日(水)～11月27日(金)
第一会場: 慶應義塾図書館展示室 9:00～18:20
土曜: 9:00～16:50
日・祝日・11月20・21日 休館
第二会場: 慶應義塾大学アート・スペース
10:00～17:00
土・日・祝日・11月20日 休館

豊臣家滅亡による平和の到来「元和偃武」から400年に当たることを記念して、平和がもたらした美を江戸前期の書物を中心に展示。



◆講演会「源氏物語を書き終えて

——源氏のことばと表現」

講師: 中野幸一

日比谷図書文化館4階スタジオプラス(小ホール)
2015年11月24日(火)
18時30分開場・19時開演
入場無料

本書は、原文の「語り」の姿勢を尊重し、忠実に訳した、本来の『源氏物語』の文体を再現したものである。全訳を書き終えた現在の心境と、その裏側を語る。

要予約(先着50名)。

下記(FAX・電話・メール)より、勉強出版までお申し込み下さい。

TEL:03-5215-9021 FAX:03-5215-9025

E-mail:info@bensei.jp http://bensei.jp/

◆特別展示「韓国古版画博物館名品展」

国文学研究資料館1階 展示室
2015年10月13日(火)～11月20日(金)
休室日: 土曜日・日曜日・祝日
(ただし10月17日(土)、11月21日(土)、11月22日(日)は特別開室)
10時～16時30分 ※入場は16時まで
入場無料

韓国国内でもあまり知られていない古版画の優品を、韓国古版画博物館の協力を得て展示。

◆第17回図書館総合展

パシフィコ横浜
2015年11月10日(火)～11月12日(木)
図書館運営者・関連業界とコンタクトをもつのに最大・最良のイベントであるだけでなく、読書・学習環境についての最新技術と知見が一堂に会する場。

日本文学史

A New History of Japanese "Literature"

第一冊

「文」の環境

「文学」以前

日本文学史を書きかえる

いま、わたしたちが思い浮かべる「日本文学」「日本文学史」は、歴史上のあり方を、そして、その本質を正しく記述しているのだろうか——「文学」として「文」という概念を改めて問い直すとき、従来の見方では見落とされてきた
広がり多様性を持った世界が広がってくる。和と漢、そして西洋が複雑に交錯する日本の知と文化の歴史の総体を、人びとの思考や社会形成と常に関わってきた「文」を柱として捉え返し、過去から現在、そして未来への展開を提示する。

第一冊では、西欧からの「文学(literature)」概念が導入される以前、特に古代から中世において、日本の「文」がいかなる環境のもとで、いかなる世界を形成していたかを描き出す。

日本における 「文」と「ブンガク」

【編】

河野貴美子

Wiebke DENECKE

「文」とは何か——

「文」という概念は、東アジアの文化史において特に重要な意味をもち、また実に多様な役割を果たしてきた。
古代日本においても、中国の「文」に関する複層的な概念が早くから受容されたが、明治期になると、それ以前の「文」の概念は大きく様相を変え、「ブンガク」ということはヨーロッパの「literature」等の訳語として現れ、現在に至るまでそれら欧米に傾倒した「文学(ブンガク)」の意味によってまず捉えられるという状況が続いている。
しかし、「文」の意義と歴史を考えると、東アジアに特有の意義をもつて形成、継承されてきた伝統的な「文」の概念への問題意識なくしては、日本、そして東アジアの文化の本質に迫ることは不可能なわけではない。
近代以降隠蔽されてしまった「文」の概念の文化的意味と意義を再び発掘し、二十一世紀の現代に続く「文」の意味と意義を捉え直してみたい。
これが本書「日本における「文」と「ブンガク」の出発点である。

本体二五〇〇円(税)

A5判並製カバー装・二五六頁
ISBN978-4-585-22628-4

勉強出版
http://bensei.jp/

編集……………

河野貴美子……早稲田大学文学学術院教授

Wiebke DENECKE……(ヴィーブケ・デーネッケ)ボストン大学准教授

新川登亀男……早稲田大学文学学術院教授

陣野英則……早稲田大学文学学術院教授

以降
続刊

第二冊

二〇一六年刊行予定

第三冊

二〇一七年刊行予定

「文」と人びと

「文」から「文学」へ
東アジアの文学を見直す

本体二、八〇〇円(税)
四六判並製カバー装・五五二頁
ISBN978-4-585-29491-7